

## 9 服飾の色にあらわれた日・米の嗜好

横浜国大教育 藤井 千枝

1 1958年8月の街頭調査の結果、ニューヨークの町の婦人の服装の色と、東京・神奈川のものとは、独立色としての用いられ方、配色の型は酷似していたが（ここまで色彩科学協会にて発表）、詳細に見ればどこが違うか、直観的には、日・米の色に可成りの相違が感じられるのは何故かを追究するために本研究を行った。この種の資料は今までにないもので、日本婦人の色彩感覚が世界水準であるかどうかを判断したり、色の用い方から日・米の国民性をうかがうことが出来たり、日常生活における配色に一つの示唆を与え、且又、将来の研究への手がかりを得るということを今一つの目的と考え本研究を行った。

2 前研究で発表した通り、東京・神奈川の町の婦人の服装の色を毎月200ずつランダムにとって調査を継続して来たが、その発展としてニューヨークの町のもを同様の方法で、海外旅行の機会を利用して、調査することが出来た。それらを統計して両国の比較を出すまでの方法は前回と同様であるが、双方から配色型の等しいものを取出して色度の用いられ方の概略、同一色相の用いられている部位等更に詳細な内容につき比較研究を行った。

3 米国の方が彩度の高いものが多く、色度差による配色がより多くなされていることが分った。